
秋桜 - another story -

七地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋桜 - another story -

【Zマーク】

Z2902BA

【作者名】

七地

【あらすじ】

「秋桜」Web拍手の御礼SSや、番外編などの短編集です。

本編を読まれてからの方がお楽しみ頂けるかと思われます。

不定期に更新していく予定です。

不安 side・ページ（前書き）

秋桜本編「嫉妬（2）・（3）」のサイドストーリーです。

不安 side・ソジ

札幌からオレ達の姫が帰ってきた。

チームの先輩から聞かされていたオレは姫に会えるのを楽しみにしていんだ。

尊敬している葵さんと愁さんが大切にしている女の子なんて一体どんな人なんだろう?

みんなと『あつとすげえ可愛いんだろうな』って話していた。

初めて梨桜さんに会つて挨拶をしたときにはいろいろな意味で驚いた。

梨桜さんはオレ達が想像していた以上に可愛い。

それと・・これは絶対に言えないけど、葵さんは双子だと思えな
いぐらい・・優しい。

優しい梨桜さんをチームの皆が大切にしようと思つている。
でも、彼女はオレ達のライバルチームのトップ達が通う高校に通つ
ていて、皆が心配していた。

そんな時、葵さんがキレる事件が起つたんだ。

その日、オレと愁さんは昼休みに生徒会室で雑誌を読んでいた。葵
さんはまだ学校に来ていなかった。

バン！！

ものすゞ」の音がして生徒会室の扉が開いた。

「ドアが壊れるつづーの・・・なにキレてんだよ」

愁さんが読んでいた雑誌から顔を上げ、葵さんを見て驚いた顔をしていた。

オレもこんなに冷たい表情の葵さんは初めてだった。

この人が冷静を欠くなんて珍しい。

「何があつた？」

「朱雀を潰していいか？」

唐突に言い出した葵さんに、愁さんは眉を顰めた。

「ダメに決まつてんだろ。梨桜ちゃんに何があつた？」

愁さんが書いたと葵さんは紙切れをテーブルの上に吊り下げるよに置いた。

「これ・・・」

「梨桜の鞄に入つてた」

愁さんは書かれている文字を読んで舌打ちしていた。
オレもその紙を見て腹が立つた。『ふざけんな』そう思つた、梨桜さんは好きで生徒会に入つたんじゃない。

「これを見た奴を探し出して連れて来させや」

怒りのオーラを纏つた葵さんに愁さんは冷静に「駄目だ」と言った。

「梨桜は怪我をして帰ってきたんだぞー? 昨日から熱を出してるんだ! 黙つてろって言うのか! ?」

普段、声を荒げる」としない葵さんが怒鳴った。

「『じ』を怪我した?」

愁さんに「落ち着け」と言われて、葵さんはソファに座り天井を仰いで深く息を吐いた。

梨桜さんは大丈夫なのか?

「左手首を捻挫した。躊躇して転んだと言いつてるけど、嘘だろ。突き飛ばされたか足をかけられて転ばされたんだ・・・」

ウチの姉に何でことしてくれたんだよー? 葵さんがキレるのも当然だ。朱雀を潰しに行くならオレも行きたい。

そう思つて愁さんを見ると腕を組んで何か考えているようだった。

「熱が出てるっていう事は・・・そうだな。転ばされて背中を痛めたんだひづな」

熱が出るといつ事と背中を痛めるといつ事の関連が分からぬオレに愁さんは「今度教える」と言つて口を閉じた。

「ウチの学校に転校出来ないかな」

葵さんがぼやいた。

「無理に決まつてんだろ」

愁さんが田を閉じたまま答えた。葵さん・・オレも無理だと思いませんす。

「じゃあ、藤島を殴りせり」

極論に思わず笑ってしまいそうになつた。

「葵、今おまえが動いたら意味ないだろ？ 落ち着けつて・・」

愁さんが冷たく笑い、紙切れを眺めた。

「藤島にやられせよつぜ？ 悔しいけど紫苑のトップは奴だ」

「オレ、アイツ嫌い」

少し拗ねたように叫び葵さんが可愛く見えてしまつた。
こいつこいつとこひ、梨桜さんと似てゐるかもしれない。

「同族嫌悪か？ 大丈夫だ、奴もお前の事嫌いだら。・・明日は定例会だ。絶対にキレンなよ？」

愁さんは繰り返して「わかつたな？」と言ふ、葵さんは渋い顔をしながら頷いていた。

次の日

朱雀を利用して梨桜さんを守るつとさせている葵さんと愁さんを恐ろしいと思った。この人達を敵に回したくない。

そして、オレは藤島と幹部の反応を見て心配になつた。

梨桜さんを奴らに奪われるんじやないか・・葵さんがそんなことをさせるわけがないのにバカみたいな心配が頭に浮かんだ。

見えない火花 side:コジ(前書き)

秋桜 本編「定例会（4）・（5）」のサイドストーリーです。

見えない火花 side・「ジ

「梨桜ちゃんの具合は？」

午後から学校に来た葵さんに愁さんが聞くと疲れた顔で首を横に振つていた。

「熱が下がらない。お粥食わせて寝かしつけてきた」

「夜まで下がらないようだつたら往診するよ」

「悪いな、頼む」

葵さんは生徒会室のソファに横になつて寝てしまつた。
熱を出した梨桜さんを看ていたそつだ。

「昨日会議を中断したから今日も朱雀が来るけど」

葵さんは舌打ちした。

「あいつら、本気なんですか？梨桜さんを朱雀の幹部にするなんて」

昨日、大橋が突然言い出したんだ。『梨桜ちゃんは朱雀の幹部だ』ふざけるなつて思った。

「オレと葵がさせないよ。梨桜ちゃんは青龍の大切なお姫様だからね」

そうだ、彼女はオレ達の姫なんだ。

「オレと姉弟なのは伏せろよ？」

「そこいら辺は大丈夫。昨日梨桜ちゃんも「弟が」って連呼してたし、まさか自分より学年が上の弟なんて思いつかないだろ」

朱雀との会議。

毎回、この会議に意義があるのかどうかは分からぬが、青龍と朱雀ができた時からの決まり事だ。
葵さんと藤島の機嫌は最悪だった。

「ウチの梨桜は体調不良で欠席」

朱雀副総長の大橋が言つ。 “ウチの”発言に愁さんと葵さんが反応する。

「昨日は梨桜が世話をになつた。礼を言つ」

藤島の言葉に葵さんの顔が凍りついた。

あ～あ、怒りの沸点を超えた。いや、葵さんの場合は氷点か？
今日、葵さんがチームに来たら絶対、荒れる。

「梨桜ちゃんはこれから、ウチの病院でしつかりケアしていくから
“心配なく”

愁さんが黒い笑みを浮かべた。今度はそれに反応する大橋。
梨桜さんの素顔を知らないはずの朱雀がこんなに彼女に執着してい

るなんて、やつぱりオレは不安になる。

その時、葵さんの携帯が鳴った。画面を見た葵さんの表情が一瞬、
軟らかくなつた。きっと梨桜さんからだ。

「どうした？」

声が何時もの100倍優しい葵さんは隣の部屋に入つてしまつた。

「面野もあんな顔するんだな」

大橋が葵さんの入つた部屋のドアを見ながら呟いた。

「早く終わらせよつぜ」

愁さんが言い会議が始つた。

そうだ。早く終わつて葵さんを家に帰してあげたい。

休憩に入り葵さんはどこかに電話した

「リンドジユースとプリンを買つてきてくれないか？ああ、いつも
のヤツ。宜しく」

簡潔に言つて電話を切つた。

「なんだ、おねだりの電話？」

愁さんがからかつた。

梨桜さんはいつもリンゴジュースを飲む。

オレが買い物に行くときにはプリンも頼まれる。いつものメニュー
が出てきたところとは熱も落ち着いたんだろうか？

「葵さん、オレ行きますよ？」

「大丈夫だよ。悪いなコジ」

葵さんは梨桜さんの話をするときは表情が軟らかい。

会議が再開される直前にコンビニで買ってきたリンゴジュースとプリンが届けられた。

「葵さん、オレ冷蔵庫に入れます」

「宜しく」

葵さんから袋を受け取つて、隣の部屋に置いてある冷蔵庫に入れた。

会議なんかいいから早く帰つて梨桜さんにひいてあげて欲しい。

会議が終わると葵さんは帰つた。

「今日はお宅の総長の意外な顔を見せてもらつたよ」

大橋が言つた

「さう?ウチでは普通だけじね」

愁さんが軽くあしらつた。

某所にて…（前書き）

秋桜本編「進路相談と大好きな人」のサイドストーリーです。
会話メインです。

某所にて…

- - 都内某所 - -

「慧さんおかえりなさい」

バーで二人の男が並んでグラスを傾けていた。

「いじら辺も変わったな」

慧が呟くと、隣に座っていた男が小さく笑った。

「まあ…それより、どうするんですか？」

「取りあえず、両方に釘をさしてきた」

慧はそう言い、残り少なくなっていた酒を一気に喉に流し込んだ。

「へえ…」

「葵も藤島もムツとしてたな。まあ、アイツらはアイツらなりに考え方ながら動こうとしてるんだろうけどな。ガキだよ」

「梨桜ちゃんには甘いのに、葵には厳しいんですね？」

「葵も梨桜もオレの可愛い双子ちゃんだぞ？まあ、葵は男だからな。多少は厳しくしないとな。梨桜はアレだ。目に入れても痛くないほど可愛い。つてやつだ」

・相変わらずですね・そつ言い、隣に座る男もグラスを煽った。

「落ち着いたらオレは赴任先に向かう

「折角帰国したのに、梨桜ちゃんが聞いたら悲しむでしょうね」

「仕方ねえだろ、世話になつた恩師に呼ばれたんだ」

「まあ、仕方ないですね」

「オレがいな間、朱雀と青龍の面倒を見てやつてくれ

「アイツらガキだからな・・」

慧は溜息をつく男を笑いながら見て、口を開いた。

「涼、頼んだぞ」

「慧さんの頼みなら仕方ないですね・・」

虫除け side・悠（前書き）

秋桜本編 「眠り姫と攻略法（4）・（5）」 のサイドストーリー
です。

虫除け side・悠

「寝るな、余計に重くなる」

聞こえているのかいなか… 富野に凭れたまま目を閉じている梨桜ちゃん。やっぱり彼女の寝顔は可愛い

「慧兄退けて、重い」

梨桜ちゃんを支えている富野が言つて、寛貴さんが彼女の顔を覗き込んだ。

「顔が赤くないか?」

その言葉に、富野が彼女の頬と首筋に触れて熱を確かめていた。

「梨桜、熱を測るぞ」

そう言つて富野は梨桜ちゃんの耳に体温計を当てる。 “ピッ” という電子音がして富野が体温計を見て眉を顰めた。

「…梨桜、薬飲んで寝ろ」

初代が富野の前に立つて屈むと、梨桜ちゃんを抱き上げてリビングを出て行つた。右腕をさすりながら富野が体を起こしテーブルに置いた食器を片付け始めた。

「梨桜ちゃんて、いつから学校に行くんだ?」

三浦が聞き、オレもそれを聞いたから富野の答えを待つた。
彼女が居ないのは寂しいから、早く学校に来てほしい。

「月曜からの予定。まだ無理だつて言つてるけど、単位が足りなく
なつたら困るから学校に行くつて言い張つてる」

「なあ、梨桜ちゃんてホントは高2?」

拓弥さんが聞くと富野が頷いた。

「事故に遭つてなかつたら、オレと梨桜ちゃんて同級生になれたか
もしれないって事だよな?」

その言葉に富野の鋭い視線が向けられた。

「冗談じやない。女子校に転校させる…そつにえば、さつき何か
隠してたよな?」

富野が段ボール箱に手を伸ばすと寛貴さんがそれを止めた。

「待て、梨桜宛ての荷物だ」

「梨桜はオレに隠し事はできないからどうせバレるんだよ」

だつたら、今見ておいて面倒事への対処を考えた方がいい。

納得できるようなできないような事を言つて、富野は強引に箱を開けて中から何かを取り出した。

「なんだこれ」

出したのは紙の束…？否、手紙だ。

宮野は封筒を捲りながら、宛名を読んでいた。

「東堂 梨桜 様、梨桜ちゃんへ、東堂 様、梨桜さま…アイツ、
転校してもこんなもんが来るのか」

もしかして、梨桜ちゃん宛ての男からの手紙？

「梨桜ちゃん、相変わらずモテてるな。まさか、連絡が取れないから
いつて、『タカちゃん』が手紙を託されてるのか？」

「やう言えば、去年も『タカちゃんの下駄箱に入れられるのを渡され
て困る』って言つてた…」

「捨てちまえよ」

寛貴さんが言いつと宮野が手紙の束をゴミ箱に投げ入れた。

「うわ、おまえらつて酷え…」

拓弥さんが眉を顰めて言つと、三浦がフツと笑つた。

「お姫様は箱入りだからな、虫除けも念入りにしてやらないと…な
あ？葵」

お姫様に近づく虫は、呆氣なくポイッと捨てられるんだ…

オレも捨てられないよつと氣を付けよつ…

約束 side : ページ (前書き)

秋桜本編「Followers」(5) のサイドストーリーです。

約束 side : パジ

梨桜さんと5代田の約束

- 1・インストラクターがいるところ以外では泳がない。
- 2・体を冷やしたままにしない。
- 3・水着は競泳用の水着を着用すること。（当たり前だ。5代田は何を考えてんだ…）
- 4・他の会員に声をかけられても相手をしない。
- 5・必ず葵さんか藤島に送り迎えをしてもらひことに。（ナンパ防止らしい）

これを一つでも破つたら、梨桜さんは京都に送られるらしい。
オレ的には4番目の約束が一番危ないと思つ。

ガラス張りになつてゐる屋内プールが見える休憩室から、インストラクターと一緒に笠原さんに泳ぎを教えてゐる梨桜さんが見える。
『麗香ちゃんが水に浮かべるようになつたんだよ』と嬉しそうに言つていたけれど、下で練習している彼女を見る限り、さうぢないけれどクロールをできるようになつてきたらしい。

彼女も頑張つている。

自分で泳いで、手本を見せながら、腕の動かし方を教えていく。友達の為に一生懸命だ。

「梨桜さんて綺麗に泳ぐんですね」

人魚姫みたいだ。

「待たせてごめんね！」

練習を終えた梨桜さんは濡れ髪のまま駆けてきた。

「こつも走るなって言つてんだろ」

笠原さんを見送つて、迎えに来た桜庭の車に乗り込む。

梨桜さんは葵さんに髪の毛を拭かれながら笑つて言つた。

「お腹空いた」

今までなら梨桜さんの口から滅多に聞くことのなかつた言葉。水泳を教えるようになつてから聞くようになつた。まだまだ小食だけど、前よりは食べられるようになつたと思つ。

「これも美味しいね」

田の前で葵さんが食べていた炒飯をパクついている梨桜さん。

5代目が水に入る事を許可したのはこの為だったんじゃないかなと思

えてくる。

お腹が一杯になれば眠くなるらしい。

今日は葵さんに寄りかかって寝ている。
この前は定番の膝枕だった。

幸せそうな寝顔を見ながら…ふと気になった。

5代田が出した約束の一つ。『必ず葵か藤島に送り迎えをしてもらひたい』

梨桜さん…藤島に迎えに来てもらひても困りますが無防備に寝てる
んですか？

もしも、この寝顔を奴等の前で晒しているとすれば…藤島と海堂が
氣の毒に思えてしまう。

オレは、どうしても氣になつて海堂に聞いてみた。

「梨桜さんで、水泳を教えた後つて何してんの？」

海堂の答えはある意味想像通りといつか…

『普通に夕飯食つて、オレに課題を教えてるか…寝てる』

「一人で？」

『当たり前だろーソファでうたた寝をしてると寛貴さんが総長室

のベッドで運んで寝かせてくれたよ』

藤島、あの寝顔を見ても耐えてるんだ…すげえ理性だな。

「おまえんとこの総長、すげえな」

『あ～ビリーフの意味だよ』

おまえにあの寝顔の破壊力が分からねえならいい…

水泳を教え始めて一週間が経とうとしている頃、梨桜さんのお迎えに着いて行くと笠原さんに飛び込みを教えていた。

手本を見せている梨桜さん。

これでマジじゃないんだ、と驚いた。

綺麗なフォームで水に飛び込み、しなやかな動きで水をかけて進んでいく。

遠田からだけど、泳ぐことが樂しそうで云々てくる。

葵さんはすつと梨桜さんを見ていた。

.

命懸け side・「ジ（前書き）

秋桜本編「背中越しの・・・」おまけです。

梨桜さん！ オレ幸せですっ！！

ありがとハヤロコます！！

「すばーっ！ 」

「いただきまますっ！ 」

山のよひに盛られた…毛ガニ、ズワイ蟹、タラバ蟹、花咲蟹…
北海道土産に蟹をこれでもか…つていつくらに買って来てくれた。

なんでも、総長・副総長4名を従えて市場まで行つて買つてきたい。
しい。

オレと海堂は幹部室で食べているけど、外では下の奴等がバーベキ
ューをしている。

「葵さんは食べないんですか？」

必死に蟹を剥いでいると、葵さんは首を横に振った。「愁さんは？」
と聞くと愁さんは首を横に振った。

「お前達に買つてきたんだから、心ゆくまで食え。オレ達は…当分
いい

は？

藤島も大橋も蟹から目をそらして遠くを見ている。
見たくないくらいに食べてきただって事か…

「梨桜ちゃんは？」

蟹を頬張りながら海棠が聞くと、愁さんが親指を部屋の外へ向けた。

「葵の我儘を叶えるために奮闘中」

「…ひでえ」

『いなり寿司食いたい』…梨桜、作つて『突然言い出した葵さんに梨
桜さんは『しあうがないなあ』と言いながらキッチンに籠つている。

「葵ー手伝つて」

扉を開けた梨桜さん。
エプロン姿が可愛い。

「あ…皆、来てたんだ。お皿にはまだ早いけど食べる？」

「食いたい！」

「ああ」

葵さんが大皿をテーブルに置いた。

「… あの短時間でこんなに作つたんだ！？」

いなり寿司とホタテのサラダとエビの…なんだこれ？皿を一つな汁物

「梨桜さん、これなんですか？」

「海老しぃじょのお吸い物だよ。手抜きだから期待しないでね」

ふわふわしていい皿。手抜きなんて言わなきや分からぬの…

梨桜さんがオレを見ている。

テーブルに頬杖をついて、じーっとオレを見ている。
…そんなに見つめられると緊張する。

「梨桜さん？ オレの顔になんかついてますか？」

うん、と頷く梨桜さん。

自分の頬をシンシンと突いて、「蟹がついてるよ」と教えてくれた。

「口ジ哥、蟹を剥ぐの苦手？」

笑顔で聞かれて、つこづきをしたしまった。

「…難しそう」

「剥いてあげる」

ハサミを手にすると、蟹を剥き始めた。

「…」

向かいに座つてゐる海堂にめぢやくぢや睨まれた。

でも、譲りたくない。

梨桜さんに剥いてもらつた蟹を食べるつて贅沢だ！…それだけで倍はぬく感じる。

「ほり、キレイにできたよ」

蟹の爪を器用に剥いた梨桜さんが「ハイ」とオレに手渡してくれた。

「いただきます！」

梨桜さんは楽しそうにしながら蟹を次から次へと剥いていく。いつものように葵さんに寄りかかりながら…。

「そんなに剥いて誰が食つんだよ」

「ゴジ君と悠君だよ」

「おまえ、大して食わないのに剥くのは好きだよな」

「キレイに剥けた時つて気持ちいいでしょ」

「ほり、剥けた！」と蟹の爪をオレの顔の前に出した。
「ハイ、ゴジ君」ニッコ笑われて…

「これはいつも葵さんにしている、アレ？」

…梨桜さんは、この視線に気づいていないんだろうか？

「」「…」「」

梨桜さんに『あーん』ってやつてもらいたい。

でも、それをやつたら……オレは3回死ぬような気がする。。

「ハジ君、食べないの?」

小首を傾げて聞かれたら……

「いただきます!」

3人の夏休み（1）

「……なんだよ、何か言いたいわけ？」

「自分ばっかりズルいと思わないのか」

「思わねえよ」

「……良く分からないんだけど、『おまえ』の声で目が覚めた。

「いや、ズルいだろ。代われ」

「オレ、免許持つてねえよ。よそ見しないで運転してくれよ」

「可愛くねえな、おまえは！ オレにも膝枕させりー。」

「ハイハイ。騒ぐと起きるぞ」

起きてるんですけど…

うるさいくて田が覚めました！

『夏休みは鎌倉の海に行きたい！』慧君がお願いを聞いてくれて、東京から鎌倉へ向かう途中。

眠くなつて葵の膝枕で寝ていたんだけど…何故か言い合いをしている慧君と葵。

「何で梨桜はお前の膝枕でばっかり寝るんだよ」

「そんなの決まってんだろ？ “オレ”だからだよ」

何だその理由..

当の本人でも分からぬいぞ。

起きよひ。そう思つて眼を開けたら、葵と田が合つた。
何を言い合つてるの?

視線で聞いたら、フツと笑つて大きな手が私の眼を覆つた。

“起きるな”って事らしい。

「とにかく、葵! おまえばつかりズルいぞ」

「そんな事言われたつて知らねー」

楽しそうに言いながら、葵の親指は私の耳元を撫でている。

「昔は可愛かつたのに」

「しうがなんじやねーの? 慧兄に似たんだから」

葵つてば、慧君をからかつて楽しんでるんだ。
素直に甘えればいいのに、ひねくれ者なんだから..

「…梨桜も梨桜だ」

え、私?

「いつも葵と一緒に寝しゃがつて」

そんな…いつも『葵と一緒に寝しなさい』って言つてたクセに

滅茶苦茶だよ、慧君。

葵は私の上で、ククッと笑っている。

スルスルと頬を撫でられる感触が心地良くて、また眠ってしまった。

「乗り物酔いはしないか？」

「うん」

私の前髪をクシャクシャにして聞く葵に頷いた。

「オレの運転で酔つ訳ないだろ。失礼な奴だな」

慧君の言葉に「スピード狂だったクセに」と葵がボソリと呟いていた。

うん、泣く子も黙る初代総長だったんだよね…紫苑と東青の強者どもを束ねていたなんて、この優しい笑顔からは想像できないけど…

駐車場に車を停めて、お祖父ちゃんの家の玄関を開けると、少し空気が淀んでいたけれど懐かしい匂いがした。

ママと慧君が育った家。

ここに、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんはもう居ないけれど、葵と夏休みを過ごしたこの家に来たかったの。

慧君、連れてきてくれてありがとう。

「梨桜！」

荷物の整理を済ませて、葵と食事の準備をしていると慧君に呼ばれた。

「慧君びじしたの」

「姉貴が若い時に着ていた浴衣が出てきた」

座敷に広げていたのは一枚の浴衣だった。
白地に百合と撫子が描かれている綺麗な浴衣。ママが着たら似合う
だろう…

「花火大会に着て行くか？」

「うん！」

3人の夏休み（2）

「…」

「ねえ、どうがことと思ひ?」

「まあ、マジで着ると思つたの」

「可愛いの選んだもん。着るよ」

ホルタ ネックのビキニはフリルのエースカートがついていて、
可愛いの。

もう一つは慧君と一緒に買に行つたショーブトックのビキニ。
どうも可愛いくて捨てがたい。

「泳げないのに?」

「海では泳がないよ。こいつ私だけそこまで無謀じゃない」

そう言つたら、ホルタ ネックとチームのショートパンツを手に取つて私に押し付けた。

「これにしろ。膝丈以上水に入るな。いいな?」

「えーーー?」

「やつと骨がくつこてきたんだろ? 水に入つて無理な態勢をとつ

て悪化させたいのか」

「…」

返す言葉が無くて、しぶしぶと水着とショートパンツを受け取った。泳ぐつもりはなかつたけど、浮き輪でちゃふちゃふしたかったの。それだけなのっ

「つたく…ビキニなんか着せせる訳ないだろ。バカだな」

それ、ビキニを買った慧君に言つて下さい。

「膨れても駄目だ」

いい天氣！

空には大きな入道雲が浮かんでいて、水面はキラキラ光つていて…
『海に来たぞ！』 つて叫んじゃいたい気分。

「気持ちいいね」

「あんまり奥に行くなよ、急に深くなるからな」

3人でお弁当を持つて海に来た。慧君はビーチでのんびりとお昼寝中。

ちゃんと言つけを守つて膝までしか水に入つていない。

「アレ、やりたかつたなあ」

砂に足をとられて転ばないように、葵と手を繋いで浅瀬を歩いてい

た。

「ソレはソレド楽しいんだけビ、やりたかつたことが出来ないのさ
よつと残念。

「…治つたらやつてやるよ」

水の中こごる葵を田がけて、高いところから飛び込む。
私を抱きとめた葵と一緒に水の中に潜るのが楽しいんだよね。

「ホント?…でも、泳げるシーズンが終わっちゃうよ」

「…雪山、とか?」

それを聞いて、フワフワの雪の中に飛び込むのを想像した。
葵と雪まみれになつて遊ぶの……うん、楽しいかも!・

「雪がたくさん降る所に行いつね!スノーボードもしたいな

「それは駄目」

即答された…ケチ!・

「あ…」

ふいに空が陰つたような気がして空を見上げると、隣も同じように見上げていた「降りそうだな」と葵が呟いたら、ポツリと頬に兩粒が当たつた。

「帰るぞ」

手を引く葵の手を引き返した。

「水着だから濡れても平氣だよ」

「風邪ひいたりじつすんだよ」

「まだ帰りたくない」

「我儘言つな」

雨粒が大きくなつたような気がする。そいつ思つて、もう一度空を見上げたら、パカッと光つた。

「あ…光つた」

「帰るぞー。」

うん、雷が鳴つてここにいるのは危険だね。

走ろうとしたら「お前は走るな」と怒られて、葵の小脇に抱えられて慧君が待つビーチに帰つた。

車の中に避難した途端、土砂降りに変わつてしまつた。

「雨、止むかな？」

窓に額を付けて外を眺めていると、隣で葵も外を眺めていた。

3人の夏休み（3）

花火大会が中止になつたらどうしようかと心配したけど、激しく降つた雨が嘘のように空は綺麗に晴れていた。

「胸は苦しくないか？」

「大丈夫」

近所の美容室で浴衣を着せてもらつた。

昔からあるお店の人は、ママの事を知つていて『あら、真紀ちゃんの？』と私が知らなかつたママの話を教えてくれた。

『真紀ちゃんは怒るとすっごく怖くてガキ大将も頭が上がらなかつたのよー』

『ファンが大勢いてね、梨桜ちゃんのパパと結婚したときは皆泣いてたわ』等々。

後で葵にも教えてあげよう。

私と葵が花火大会に出かけようとすると、玄関先で腕を組んで泣い顔をしている慧君。

「梨桜から田を離すなよ？」

「ああ」

慧君も花火大会に行く予定だつたけど、急遽同窓会に呼ばれて一緒に行けなくなつて、機嫌斜め。

「変な男に絡まれるなよ」

「…ああ」

「手を掴んでないとフカフカ届なくなるからな。迷子になるぞ」

「…」

「ちやんと見てろよ！？」

「分かってる！ 同窓会に遅れるぜ？」

慧君、心配しそう。

私はそんなに子供じやないから…

「行つてきます！」

慧君に手を振つて家を出た。

手を繋いで葵と歩いていると、皆が私達を見ている。

ここでも葵は注目の的。海でも女人の人の注目を浴びていたもんね…

花火が打ちあがる前のお楽しみ。

屋台でお買いもの！

「あ、りんご飴」

大きいのよりも、姫リン♪で作ったりんご飴が好き。

「… やつを綿あめ買つたろ」

「両方買ひの」

夏祭りの屋台で買ひのは、たこやき、綿あめ、りんご飴。これは必須なんだよ！
それから…

「水玉一玉一だ！葵、釣つて？」

「ガキ…」

何歳になつても楽しいのーー！
リクエスト通り、ピンクの水玉一玉を釣つてもらつた私は、機嫌で葵と歩いていた。

「葵ー」

「次はなんだーー？」

「見てー始まつたよーー！」

打上花火が上がつて、周囲からもワアッと声が聞こえた。

「… 涼いね」

慧君から花火が良く見える穴場を聞いて来たんだけど、到着した高台の公園はカップルだらけ…

「ここまで人が多いと穴場じゃなくなってるな」

イチャついているカップルの間を潜り抜けて、空いているベンチを見つけたけれど座つていいのか迷ってしまった。
…ママの浴衣を汚したくない。

「梨桜」

名前を呼ばれて振り返ろうとするが、葵が私のお腹に手を回した。

「なに?」

体を後ろに引かれて、ストン、と腰を下ろしたのは葵の膝の上…
吃驚した…

「汚したくないんだろ?」

「うん、葵ありがと」

葵の右足の上に座らせてもらひて花火を見ることにした。

「綺麗だね」

「そうだな」

「葵と一緒に見たのは…高校に入る前だつたよね」

やつ言つと、葵は何かを思い出して笑っていた。

「何で笑うのよ」

「梨桜が迷子になつたのを思い出した。慧兄の言つ通りだな、梨桜は昔から田を離すとすぐにどこかに行く」

「私が普通で、葵がいい子過ぎたんだよ」

「逆だろ、オレが普通で梨桜が落ち着きのない子供だつたんだよ」

悔しいーでも、小学校の時に先生から『梨桜ちゃんはおてんぱさん』って言われた事がある。

それに反して葵は『葵君は落ち着いてるのね』って…

あれ？葵つて昔と今では違つよね

「葵」

「ん？」

「今、葵がやんちゃなのは子供の頃の反動?」

気になつて聞いたら、思いつきり嫌な顔をされた。

「落とかすわ」

そつ言つて、支えてくれていた手を離そうとした。

「やだー。」

足の上に座るのって結構バランスを取るのが難しいんだからー！今だつて葵に支えてもらつて座つてるのにーー

葵の首にしがみついていると「たこ焼きがつぶれるぞ」と言われて慌てて離れた。

たこ焼きを買つたの忘れてた。

「食べる?」

「ああ」

楊枝にたこ焼きを刺して葵の口元に持つて行くと、一口で食べた。

「美味しい？」

「ん」

「いただきまーす！」

「美味しいね」

屋台のたこ焼きつてビーフしてこんなに美味しいんだろ。

「おまえはガキみたいだな」

眉を顰めて私を見ていた

「え？」

私の膝の上に乗せていたハンカチを取つて口元を拭いてくれた。
あれ、ソースついてた？

「だつて、たこ焼きが大きいんだもん」

「一気に食つからだる」

「一口で食べるのが美味しいんだよ」

「あつそ…梨桜、もう一個

葵に催促されてたこ焼きをもう一つ食べさせてあげて、私はフフッ
と笑つてしまつた。

「葵だつて、ソースついた」

口元を拭つてあげると疑いの顔で私を見ている

「ワザとじだる」

「知らないよ」

「ワザとじやないもん

「梨桜のクセに生意氣だ」

「葵だつて、葵のクセに生意氣ー」

「花火はどうだつた？ラストは豪華だつたんだろう？」

次の日の朝、慧君の問いに一人とも答えられなかつた。

「どうした？二人とも」

「綺麗だつたんじやねえの？…多分」

たこ焼きのソースで言い合つて、一番見所だつたラストの花火を見逃した。

なんて恥ずかしくて言えない…

肉食 VS 肉食 side・悠

梨桜ちゃんと、寛貴さんが女豹に喰われる…

遡ること一時間前、梨桜ちゃんが「海老フライ食べたい」ポツリと言つた一言で繁華街にやって来た。

彼女の口から『食べたい』といつも葉はあまり出でないから、何よりも優先されてしまつ。

「幸せー！」ヒーヒーの梨桜ちゃん。「梨桜ちゃんて海老が好きなんだな」と聞けば「うん」と頷く姿がやっぱり可愛い。

「！」の後、「どうする？ 梨桜ちゃんもクラブに行つてみる？」

拓弥さんが聞くと、寛貴さんを見上げる梨桜ちゃん…
一人の雰囲気が自然で、もしかして…と思つていたら

「梨桜ちゃんー！」

大きな声がして、女が梨桜ちゃんに抱きついた

「吃驚した… 杏子さん？」

抱きつかれたまま、本気で吃驚している梨桜ちゃん。
寛貴さんから一瞬、殺氣が感じられたけど、相手が女だと分かつて
抑えているらしい。

「 もひー！全然お店に来てくれないんだからー。」

梨桜ちゃんに抱きついているのは、これから出勤らしい夜の蝶…
同伴らしいサラリーマンのおっさんは呆然として美少女に抱きつく
夜の蝶を見ていた。

あれから無理矢理連れられた店で、この店のナンバーワンホステス
は美少女にべつたりだ。

「梨桜ちゃん、フルーツ食べる？メロンがいい？苺にする？」

男を癒す筈の店で、ナンバーワンは美少女しか見ていない。

「杏子さん…私、お腹いっぱいです」

「やうなの？お金なさいいのよ、涼君に付けるから」

勝手に五代目につけられるこの人って…何者

「拓弥さん、この人って？」

「四代目の副総長の彼女」

「え、だから強気なんだ。」

さつきから思うのは、この人は梨桜ちゃんが大好きなんだつて事。
…客も放置されていて氣の毒だ。

「梨桜ちゃん、写真撮ろー！」

突然始まった撮影会に寛貴さんの顔がひきつってきた。

「あひ、藤島、私のあることに対するあるの~。」

「あの写真を撮りたかったですか」

祐子さんという女性の迫力に梨桜けやんも引き気味で、寛貴さんの方に逃げている気がする。

「決まってるでしょ、見せびらかすのよ」

「誰に?..」

「代々の幹部よ」

なんだそれ…オレと拓弥さんが呆氣ことられないと「皆、梨桜ちゃんに会いたがってるのよ。でも、初代が許してくれないのよね」とブツブツ言つていた。

「梨桜は見世物じゃない」

寛貴さんが慄然として暫つと、祐子さんは「呆れた」と皿を見開いていた。

「藤島、じぶんに可愛い子を隠しておくなんて何考えてるのよー? 私なら見せびらかすわよー周囲に見せつけてやるわ」

この人の思考回路つ…オレが呆れないと、隣で「思い出した」と拓弥さんが引き攣つた笑いを浮かべていた。

「拓弥さん、なに?」

「杏子さん、 可愛いのが大好きなんだよ。男も女も関係無く…」

ギョッとして梨桜ちゃんを見ると、杏子さんに「梨桜ちゃん大好きー！」と抱きつかれそうになっていた。

「いい加減にしろー！」

寛貴さんが、抱きつかれる寸前で梨桜ちゃんを自分の方に引き寄せて杏子さんの攻撃を防いでいた。

「ちよっと、邪魔すんじゃないわよー生意氣よ藤島ー！」

「うぬせー！」

睨みあつていて、引く気配はない。梨桜ちゃんは困り果てた顔をして携帯を取り出してどこかに電話をかけた。

「…葵、 来てくれる？」

「梨桜ちゃん、 それは止めた方がいいぞ」

拓弥さんが言つと「え? して?」と聞き返された。

「どひしへじやねーよ、 これ以上増やすなー三つ田にしてどーすんだよー！」

拓弥さんの意見に賛成だ。

肉食の三つ巴なんて…想像するのも嫌だ。

あと五分で午後の授業が始まる。

オレは、午前の授業をサボつて午後から登校。教室に行く前に拓弥さんに用事があつて一年の教室に来ていた。

『全校生徒の皆さん、学校祭実行委員会からのお知らせです』

突然、教室にあるテレビの電源が入り、放送委員の顔が画面が映し出された。

『今回、学校祭のプレイベントとして同じ地域にある乳児院にハロウインにちなんだプレゼントをしたいと思います。そこで、皆さんへメッセージです』

「そんな話あつたか?」

寛貴さんが拓弥さんに聞いたけれど、首を横に振っていた。オレもそんな話は知らない。

『『全校生徒の皆さんこんにちわ』』

画面に映し出されたのは…
何してんだよー?」の一人…!

『1年2組の笠原麗香です。』

『東堂梨桜です』

「梨桜ちゃん…？」

なんで放送室にいるんだよ。

『学校祭イベントに賛同して畠山さんにお願いがあります』

生徒達はテレビの画面を食に入るよう見ている。

梨桜ちゃん、テレビ映りもいいんだな…

『乳児院に入所している子供達にお菓子のプレゼントをしたいと考
えています。そこで、賛同して下さる方はお菓子の寄付をお願いし
ます』

梨桜ちゃんに代わって笠原が話していると、教室内がざわわついた。

「乳児院ね…家庭の事情で施設に預けられてる子供達だよな」

拓弥さんの言葉に寛貴さんが頷いている。

実行委員会から協力してくれって言われたんだろうな… 梨桜ちゃん
なら率先してやりますうだ。

寛貴さんも同じことを考えているのか、柔らかい表情をしている。

「お菓子ね…実行委員から変なことさせられなきゃいいけどな」

「変な」とつて?」

「「」」

一気に不機嫌な顔に変わった寛貴さん。

梨桜ちゃんが魔女のコスプレしても可愛くなるんだろうな…

『…というわけで、実行委員会と協力してくれた笠原さんと東堂さんからでした。最後に一人からのメッセージです』

なんだ?と思つていると、一人が顔を見合させて小さな声で『せーのっ』と言つていた。

おい、何を言つんだ?

寛貴さんと拓弥さんは怪訝な顔をして画面を見ていた。

『『お菓子をくれなあや、イタズラしちゃつやー。』』

画面に向かつてスッゲー可愛い笑顔。

「…」

「「「つおーっ…」」

隣の教室から雄叫びが上がつている。

「姫、最高…」

「姫カワヰー…」

梨桜ちゃん…！

野郎共を興奮させてビーすんだよ…

「梨桜ちゃんおもしれーーーあの子とこると飽きないな」

拓弥さんは大爆笑だけど、寛貴さんが…マジでヤバイぞ！

「あの、バカ…」

「寛貴、おまえわ…もひひし血覚をむかへよ」

拓弥さんが笑い過ぎて田尻に浮かんでいる涙を拭いながら言ひていた。

梨桜ちゃん、オレもむかへよ。

美少女に可愛く『イタズラしちゃうわ』なんて言われたら健全な男子高校生はイケナイ妄想で頭がいっぱいになつちやうんだよ。

キミは超絶美少女だつて血ひりとを自覚して、男がどうこうものか学んだ方がいいよ…

寛貴さんが携帯を手にして立ち上がった。

「行くのか？」

「ああ」

寛貴さんは電話をかけながら教室を出て行った。背中が怒つてるよ…

「あ～あ、お仕置きだな」

「…だよな」

梨桜ちゃん、今回ばかりは仕方がないよ。頼まれたのは分かるけど、最後のアレはダメだろ。

大人しく寛貴さんのお仕置きを受けるしかないな…

「あ… 寛貴に手加減してやれって言うの忘れた」

「拓弥さん、無駄だと思つ」

「…仕方ねえな、今田は梨桜ちゃんが悪い」

後から笠原に聞いた話だけど、寛貴さんは嫌がる梨桜ちゃんを担ぎ上げて学校を後にしたらしい。

次の日「怒られた?」と聞くと力なく頷いていたらしい。

「Trick or treat」

すつげー 可愛い魔女が小首を傾げている。

「…オレが甘いもん持つてるわけねーだろ」

冷たい一言に頬を膨らませている可愛い魔女

「じゃあ、悪戯する!」

「やれるもんなら、やれよ」

「ヤリと笑い、羽交い絞めにして抱き込んでいる葵さん…どっちが悪戯してんですか。梨桜さんが苦しそうだから止めてあげて下さい。」

「梨桜ちゃん、ハロウインが何を由来しているか分かつてる?」

愁さんの問い掛けに首を捻つて考えている。

「梨桜ちゃん、ハロウインはね10月31日の夜に死者の靈が家族を訪ねたり、精霊や魔女が出でくると信じられていたんだよ」

そこまで聞いて梨桜さんの顔が引き攣った。

梨桜さんは、ホラーが大嫌い。怖くて仕方がないらしい。だから“死者の靈…”なんて単語はタブーだ。

「つて事で、新作を借りてきたんだよね。梨桜ちゃんも一緒に見る
？」

手にしていたのはホラー映画。大して怖くないと思つんだけど、梨
桜さんはきっと泣き出すくらいに怖い筈だ。

愁さん、オレには精霊や魔女よりもあなたが怖いです。

「やだ！見ない！」

そんなに怖いなら、隣の総長室にいればいいのに、一人だと怖いか
らそれもできないらしい。

映画が始まると、梨桜さんは葵さんにじきゅーっと抱きついて、自分
の耳を葵さんに塞がせている。

すっげー羨ましい。

でも、梨桜さんにしがみつかれたら、オレ動悸が激しくなって呼吸
困難で死ぬかもしれない。

お見舞い side・悠(前書き)

秋桜本編「足りないものは...」(6)・(7)」のガイドストーリーです。

お見舞い side・悠

「寛貴さん、熱下がったんすか？」

「ああ」

珍しく風邪を引いた寛貴さんだったけど寝たら熱が下がったらしく見事に復活していた。

「オレからお見舞いせびりした?」

「帰った」

「ヤニヤニしている拓弥さん

「なんだよ」

「別に」

梨桜ちゃんにお見舞われたい…

その時、リビングの扉が開いた

「あら、来てるの」

「ども」

「お邪魔します」

寛貴さんのお婆さんが帰ってきた。

いつも夜中に帰つてへりしこお袋さんを見るのは久しぶりだった。

「あーお腹すいたわー今日はお夕飯があるの?..」

キャリアウーマンのお袋さんはテーブルに乘せられていた料理を見て「美味しそうね」と笑みを浮かべていた。

「それはオレの、お袋のは無い」

「…政美さんに作つてもらつたの?..」

「違つ」

「梨桜ちゃんだろ? 今日のメニューはなんだ?..」

拓弥さんが食器にかけられていたラップを捲つていると、おばさん
が興奮しだした。

「ちよっと、ぢりこひーとー?..」

「…喚くなよ」

びつしてお袋さんは熱いのに一人息子の覗貴さんは冷めているんだ
…謎だ。

「あんた彼女できたのー?..」

「…」

無言の肯定。

それを読み取ったお袋さんは頬に両手を押して喜んでいた。

「なんで帰したのよー。会ったかったー。どうこうの子なの? 可愛い?」

興味津々のお袋さんを無視している寛貴さん。梨桜ちゃんは美少女なんだから自慢すればいいのに。

「すつづー美少女ですよ。優しくて料理が上手いんですよ」

オレが代わりに応えると、お袋さんはニヤニヤと笑っていた。

「くえ、あんたにはもつたいないわね。今度紹介しなさいー。」

「会つてじぶんさんだよ」

「お蝶づ」

「やめてくれ」

お袋さんが冷蔵庫を開けて「え?」固まっていた。

「寛貴、あなたの彼女って…おもしろこわね」

「は?」

冷蔵庫から皿を取り出してテーブルに置きラップを外すと…

「おまえ、畠野と同じ扱いになつてんじゃね?」

「つれさみに切られたリンゴがたくさんあった。」

「富野って？」

「東青の富野葵、おばさんも聞いたことがあるでしょ？」

「あの、模試でいつも張り合つてる富野君？なんであんたの彼女が富野君とあんたを同じ扱いにするのよ」

「オレ聞いた！初代が梨桜ひやん達が小セこときにカサリン、作つてくれて大好きだつて」

「ちよつと、分かるよつて話なさー。」

「富野葵と梨桜ひやんは双子なんだ」

「なんか…凄い子ね。富野君で青龍のトップでしょ？」

「そつ、梨桜ひやんは朱雀と青龍のお姫様」

「姫とかつて、羨ましいわ～」

「妄想すんな」

オレ達が呑気に話している時に…まさか双子が大喧嘩をしているなんて思わなかつたんだ。

「なんでおまえらまでいるんだよ……」

もともと不機嫌なのに、オレ達の顔を見て眉を吊り上げる五代目。優しい主治医の仮面がバラバラと剥がれ落ちているが、患者が目の前に居ない今はどうでもいいらしい。

「女豹に梨桜ちゃんが喰われないか心配だつたから」

オレが言つと、フンと鼻で笑いグラスを煽る色男。

「つたく…同伴しろつて煩いから時間をあければ梨桜ちゃんだけでいいつて…女子高生と同伴するホステスなんて見たことないぞ」

オレも初耳だ。

「いらねー。コジ、作れ」

キャバクラに来て小嶋に水割りを作らせているバカな宮野…そんなに嫌なら来なければいいのにシスコンは双子の姉が心配で仏頂面でソファにふんぞり返つていてる。

「さやあー拓弥くんおもしろーー！」

目一杯この環境を楽しんでいる拓弥さん。

その隣で煙草を吸いながら一生懸命話しかけてくるキャバ嬢を無視している寛貴さん。

なんなんだよ、この席。

全員がバラバラ…

「やべ、良かつたね。……早く戻つておいで、待ってるから。……
うん、気を付けて」

三浦が携帯で喋つてゐる。

それをギロリと睨んでこゝの高野と覗覦さん。

「愁、梨桜ちゃんか？」

携帯をしまいながら兄貴の問いに頷いてグラスを傾けていた。

「杏子さんとの買い物が終わつたからこれからうちに向かつて
… なんで愁に連絡するんだよ」

富野が腹立たしそうに言えぱ一矢口と笑つ三浦。

「おまえだと口煩いからだ」

「おかえり」

三浦が微笑むと「ただいまー」と笑顔が返つてくる。
ホントにキミは三浦に手懐けられて…

「買い物は出来たのか？」

5代田が聞くと「涼先生、見て見て！」と携帯の[♪メを見せてくる。

「杏子さんが可愛いピアスがたくさん持っているお店に連れて行ってくれたの」

今日は友達の誕生日プレゼントを貰いに行くって言つて出かけた。

「可愛いのが一杯あつたから私もピアスがしたくなつちやつた。」

その発言に反応しているのが約2名…
ピアスならオレも開けたから分かるけど、そんなに殺氣立つモノじ
やないと思つんだけど…

「涼先生、ピアス開けて下せこつてお願いしてもいいですか？」

「梨桜」

宮野が低い声で呼ぶと、チラリと奴を見て視線を5代田に戻してい
た。

5代田は宮野と寛貴さんを見て苦笑いを浮かべながら梨桜ちゃんの
耳に触れた。

「ピアスが似合つ耳だと思つた…開けるとしたら冬だな。開ける
方法は2つある」

「え？ピッサーでパチン！て開けるんじゃないんですか？」

オレは彼女に勧めらんねーけど安全ピンで開けたぞ。

「ウチの病院は2つ。ピアスガンか一ードル。どっちがいい?」

「一ードルってなんですか?」

フルーツに刺さっていたピッグを抜き取り梨桜ちゃんの手に乗せると、それを耳に当ててチクリと刺していた。

ビクッと肩を竦めている梨桜ちゃん。

それ位でビビってたら貫通させらんねーぞ?

「針だよ。先端が尖っているから傷の治りは早いけど、痛いのはどっちも同じ。梨桜ちゃんが大嫌いな点滴の針なんかよりもずっと太いからね…」

完全に引き攣つっている梨桜ちゃんにトドメの一言。
怖がつていてる梨桜ちゃんに嬉々として話している5代田つて…

「ピアスができるなり、毎回『点滴嫌い』なんて我儘は言わないよな? オレとしてはピアスで点滴嫌いが治ればいいけど?」

フルフルと首を横に振つている。

「ちょっと、涼君! 怖がつてるじゃない、止めなさい!」

どさくさに紛れて梨桜ちゃんを抱き寄せている女豹。

それを見て眉を吊り上げた宮野がすかさず奪い返していった。

「梨桜ちゃん、まだピアスしたい?」

首を横に振つて宮野にしがみついている。

「まあ……葵と藤島の許可が取れたらおいで

齧すだけ齧して、そりゃねーだろ。

それに、許可なんか取れる訳がない。

この2人の目を見ればわかる。全身で『体に傷つけるな…』 そう言
つていい…

ピアスくらいしたいと想うならさせてやれよー。

やつはオトナだと思ひつけないでさあ。

寂しげ理由　田代・アーヴィング（著者）

「おかげ」のチャーチスターの一です。

寂しい理由 side・「ジ

愁さんは、この状態を『田の毒』って言っていたけど…

確かにこれは……でも、オレはずつと見ていたいかもしれない。

幹部室のソファでオレは梨桜さんの手伝いで胡桃の皮を剥いていて、梨桜さんは編み物をしながらオレとおしゃべりをしてくれている。

愁さんは梨桜さんが座っている向かいのソファに横になつて昼寝。

葵さんはといえば……梨桜さんの膝枕で同じく昼寝。

長い脚をソファの肘掛けに乗せて綺麗な寝顔を惜しげもなく晒している。

「よお」

突然開いた扉に梨桜さんが一瞬口ごとに微笑んだ。

部屋に入るなり固まつた大橋と海棠。
この光景に驚いたか？

「「ー?」」

「 寛貴ー.」

嬉しそうな梨桜さんの声。「『どうしたの?』と聞かれて『マイツに呼ばれた』と愁さんを指して言った。

藤島つてこの状況でも動じないのかよ?

普通、嫌だろ…自分の彼女が自分以外に膝枕してるなんて。

梨桜さんと藤島を見ていたら、オレは見てしまった。

一瞬だけ、葵さんの眉が不機嫌そうに寄せられたのを…

寝たふりですか?葵さん?

「愁君?」

梨桜さんが言つと今まで固まっていた大橋が我に返つたように愁さんを見た。

「三浦、土産!」

大きな声に愁さんは眉を顰めて目を開けた。

「おまえは相変わらずいつもせえな…そこにある。つたく土産、土産つて…」

『土産!』 そう強請つたのは海堂だと聞いていた。

葵さんが買つて来るとは思えないから愁さんが買つて来たんだよな…

「葵、起きて」

梨桜さんに起こされると、ジロリと藤島達を一睨みし、また目を閉じて寝返りを打つた。

『眠いんじゃなくて、起きたくない』なんですね…駄々っ子みてえ

「…」

起きない葵さんに梨桜さんは髪の毛を撫でて優しく話しかけていた。

「眠いなら隣の部屋に行こ？」

こんな風に起こされたらオレなら絶対に起きる…やつ思つてみると葵さんがムクリと起き上り髪をかき上げて梨桜さんの顔をジッと見ていた。

「…」

「え？」

葵さんは咳くと首を傾げていて梨桜さんの頬に手を当てていた。

「？」

「やつと分かった」

言われている意味が分からずにキヨトンとしている梨桜さんに一人で納得している葵さん。

「葵、何が分かったの？」

梨桜さんの顔をジッと見て、いつもの“きゅう”ついでアレをやつた。

唖然として田が点になっている大橋と海棠。さすがに藤島も驚いているようだつた。

彼氏の前でいいんですか??と思つたが梨桜さんは大人しく葵さんの腕の中にいて、不思議そうに顔を見上げていた。

「…前に梨桜が寂しつて言い出して離れなかつたことがあつただら」

葵さんはまるで梨桜さんと二人きりのように彼女だけを見て話しかけていた。

「?…結構前の事だよね?」

梨桜さんは「中学の時だよね」と言いながら首を傾げている。葵さんも葵さんだけど、梨桜さんも相当だぞ?弟とはいえ、彼氏の前で!!

「あの時、理由は分からぬけどヤダつて言つて泣きそうだつたよな…何で梨桜がそう感じたのか分かつた」

「……えつー?教えて!」

藤島を睨みながらボソリと「絶対に教えねー」と言い腕に抱いていた梨桜さんを抱き上げた。

「葵ー?」

「お前らには見せねー」

「おい、葵？」

焦った愁さんの制止も聞かずに部屋を出て行ってしまった。

バタンと閉められた扉を見ながら大橋が呆気にとられていた。

「なんだアイツ…」

藤島がボソリと「シスコン…」と呟いていた。

シスコンは知ってるけど…藤島には意味が分かったのか？

ジンクス？ side・悠（前書き）

秋桜本編「昨日よつも…」（5）「サイドストーリー」です。

ジンクス？ side・悠

ウチの生徒なら一度は田にしてみたい光景

場所は屋上。

壁に背を預け片膝を立てて座っている寛貴さん。

その立てた膝に手を這ひ、楽しそうに何やら話しかけてい梨桜ちやん。

足の間にすっぽり収まつた梨桜ちやんは急に真顔になつて寛貴さんを見つめると田元にチュッとキスをした。

見ていろ！ ちが赤くなる…

誰にも見られていな」と思つてゐるんだひつ。 幸せな子だよ。 つた
く…

屋上にいる一人を見るトラッキー。

イチャつてゐるのを田撃できると超トラッキーだと言われてゐる恋愛ジンクス。

こんなのがイチャつてゐるだけじゃねーかつーオレなんかいつも見せられてる…

オレなんかなあ、とんでもなくすつげーもん見ちまつたんだぞ！

結構ショックだつた

場所は藤島邸、ちなみに豪邸。

梨桜ちゃんに無理やり女装させられてメイクをされたオレは学校から逃げてきた。

結婚に迷ひがちで諂ひなくて本音を言いたくて夢枕が二ノ瀬を

いつもの裏口から入ると玄関の鍵が開いていた。

珍しい

そう思いながら家に上がり、一階のリビングの扉を開けた。

ソファの上に無造作に置かれていた梨桜ちゃんの荷物。ここに居ないって事は寛貴さんの部屋か…

梨桜ちやんにやられた仕返しに驚かせてやつ。つい思ひで顔を立てないように貴さんの部屋の前まで行った。

扉に手を掛けようとして聞こえてきた声に手が止まつた。

「 もっ……やだあ…」

イヤイヤと首を横に振る梨桜ちゃんの田から涙が零れ落ちていて、それを唇で拭つている寛貴さん。

扉の隙間から中は見えるが、角度で良く分からぬ。
どうやら彼女を自分の膝に乗せてこらしこ。

「 梨桜、どうして欲しい?」

見るからに寛貴さんのだと分かるシャツを着ていて、白い肌が見え隠れしている。

すつづ…綺麗。

「 んつ…やあ…ひ、ぬ…や」

寛貴さんに向かって腕を伸ばす梨桜ちゃんを見て口角を上げている
よみに見えてる。

「 梨桜、『恋葉ドリル』よ」

「ふ…え…」ぬ、んな…そこ」

ポロポロと涙を流す梨桜ちゃんの泣き顔とは対照的な声色の寛貴さん。

「 違うだろ?」

「 ……て」

「聞こえない」

「やあ」

「...」

口を塞がれて体をズルズルと引きずられた。

「おまえなあ、見つかつたり殺されるだーー!?」

オレを寛貴さんの家から連れ出したのは拓弥さんだった。

「ワザと同じー偶々見えちまつたんだつ」

「結果的には覗きと同じだーが

「うう...」

そう言わると何も言えない。

「なんで拓弥さんはここにいるんだよー...」

「あ？ オレは梨桜ちゃんに聞きたこしがあったんだよ。... まさか
お仕置き中だとは思わなかつた」

お仕置き？

「あれってお仕置きなのか」

オレが言つと拓弥さんは呆れた顔をしていた

「…あれがお仕置きじゃなかつたらなんなんだよ。まあ、あんな恰好をしていた梨桜ちゃんも悪いけどな。…おまえはいなかつたんだよな」

「…」

正確には、居た。

女装した姿を見られたくて逃げたんだけど…梨桜ちゃんはなんでお仕置き？

「でもあのセーラー服もやせるみな。露出高くてオレ好み」

ああ、ヤンキー仕様のセーラー服な…確かに

「拓弥さんが聞きたい事つて？」

「おまえも梨桜ちゃんと同じクラスなら知ってるよな。生徒会室から逃げたあの美少女は誰だ？」

背筋にゾクリと震えが走った。

その眼は…気になる女を追いかける田だよな？

「…そんな事知つて、どうすんだよ」

止める、止めてくれよ…?

「分かんねえけど、気になる」

…オレは追いかけられたくねえぞーー！」

狭い世の中？ side・安達

……世の中ってわかんねーもんだな。

- 富野 慧 -

頭脳明晰、容姿端麗。

性格は超オレ様。

そんなメチャクチャな男でも、筋が通つていて真っ直ぐ。
口は悪いけど優しいところもあって憧れている生徒も多い。

とにかく目立つ存在。

憧れていた生徒会に入れて、半年たった今も富野先輩に声をかけられると緊張する。

「慧ー、ビニィくんだよー。」

生徒会顧問から呼ばれて職員室に行っていた先輩は、生徒会室に戻つて来ると慌ただしく帰り支度を始めた。

「姉貴から呼び出し。ワリイ、荷物持つてきてくれるか？」

生徒会に入ったばかりのオレは憧れの先輩から頼まれて慌てて頷いた。

宮野先輩が行ってしまった後の生徒会室は緩い雰囲気になり、生徒会の仕事に手を付けずにしゃべっていた。

「慧の姉貴見たことあるか？」

「ある！スッゲー美人！」

「マジ？」

美形一族か…羨ましい。

男でも綺麗な顔をしている先輩のお姉さんなら凄く綺麗なんだろうな…。

「おまえも運が良ければ見られるかもよ？」

スッゲー美人のお姉さんに会えることを期待してきた先輩のウチ。

玄関のインター ホンを押すと、「開いてるー」と先輩の声がした。

「おじやまします…」

恐る恐る扉を開くと、パタパタと小さな足音がした。

「」「…」

「 もやー。」

もやー？

子供がパタパタと走ってきた。子供？

「 捕まえろー。」

先輩の声がして、走り回るチビッ子を慌てて抱き上げた。

「 やあっー。」

ちっせー…

腕に抱き上げたその子は… 田をくづくつむかへてオレを見ていた。

「けーたんのおともだち？」

オレの田をジッと見ているチビッ子を見て驚いた。この子、人形みてえ…

「けーたんのおともだち？」

答えないオレの顔を見ながら小さな手でオレの顔をペタペタと触っていた。

「 安達、悪いな。助かった」

先輩は腕まくりをしてズボンの裾をまくつていって、腕には小さい子供を抱いていた。

オレが抱いている子供と同じくらいの…

「けーたん！」

オレの腕にいるチビッ子は先輩に向かつて両腕を伸ばしていた。

「このおでんば娘！」

最初に抱いていた子供を片腕で抱き、オレが抱いていた子供も、もう片方の腕に抱いた。

その仕草は手馴れていて、子供たちも当たり前のようすに先輩に抱っこされていた。

「あーたん！」

「りー」

「入れよ」

腕に抱かれたままじやれている子供達を抱いたまま先輩は家の中に入つて行つた。

通されたリビングで先輩が子供達をソファの上に下ろした。

「先輩、ここの子達は……」

「姉貴の子。双子だぞ」

『スッゲー美人』なお姉さんの子供は人形みたいに可愛らしく、この家の遺伝子はどうなつてんだよ……

双子同士顔を見合わせてキャッキャと笑っている。

何がそんなに楽しいんだか…

・・・・

今思えば、アレが双子との初対面だつたんだよな。

まさか…あの時抱き上げたチビッ子がオレの教え子になるなんて。

「藤島、いい事教えてやろうか」

生徒会室で「コイツ」と一人。退屈凌ぎに声をかけたが…

「…」

おまえなあ、オレは仮にも教師だぞ。

しかもチームの大先輩だぞ？その面倒そうな顔はなんだよ…

ムカつくから意地悪してやる。

「東堂つて実は甘えただろ」

「…」

見てりや分かんだろ。って言ひてえ顔だな？
ふん、苛めてやる。

「両腕を伸ばして“抱っこ”を強請る癖があるだろ?」

冷めた表情が一気に不機嫌な顔に変わった。

藤島つてもつと冷めた奴だと思つてたけど、東堂が絡むと熱くなるんだな。

まあ、それはアイツも同じだけどな。今度『あーたん』って呼んだらどういつ顔すんだらうか？見てみてーな。

「あれ、可愛いよな。抱っこしてやるとほつぺたスリスリするのな

お～…マジで睨んでる。

本気になれる対象ができるつてーのはいいことだと思つぞ？

「何で知つてんだよ。つて顔だな？」

つつーか東堂、高校生にもなつてその癖が抜けねえんだな。
おまえは3歳児のままかよ…

「『じ』で見たんですか？」

先輩に甘えて抱っこを強請るのを見た時に聞いた。つて事は教えてやらねえ。

「…『じ』で見たんだって聞いてんだけど」

「…お、落ち着け、藤島」

ちゅつと…その眼はオレでも怖いかもしれない。

「先生ー！」などといひこいた！

タイミング良く現れたのは渦中の“甘えたちゃん”人形みたいに可愛らしかったチビッ子は美少女としてオレの前に立つている。

「おー、どうした？」

「先生、実行委員が探してましたよ」

助かった。と心中でホッと息をついた。

「分かった。じゃーな、藤島」

席を立つと、オレの背後で「梨桜、来い」と藤島が言っていた。
…東堂、悪いな。

後の事は頼むぞ！

snow white (1) side・悠

『海棠、梨桜に教わつておいて赤点取るなんてふざけた』とするなよ』とか

『平均点 + 10点だ』とか…

散々、二人の総長に脅された期末試験。

オレ的には、次期生徒会長は“東堂梨桜”がいいと思つ。

…そんな結果だつた。

補講、補講の毎日に泣きたくなつてくる…

「ただいま…」

豪邸のリビングに繋がる扉を開けると

「よお！補講は終わつたか？」

拓弥さんのあつけらかんとした言葉の背後で、滅多に見れない光景が展開されていた。

「あら、美味しい！」

「…オレのだ、食うなよ」

藤島邸で寛貴さんのお袋さんと家政婦と食事をしてこらえてなんだか変な感じだ。

「女子高生で」の味が出せるのって凄いですね

『昆布巻きを食べて家政婦の政美さんが感心している。

広いダイニングテーブルに並んでいる料理を見ると、お袋さんと政美さんが食べているおかずと、寛貴さんと拓弥さんが食べているおかずが違つ。

「つて」とは、梨桜ちゃんが作つていつたんだな。オレも早く食べたい。

「彼女がお料理上手つていいですね。寛貴さんは幸せ者だわ」

「寛貴、こつになつたら会わせてくれるのよ?...あら、ソレも美味しいじゃない?」

「だから...ねえ、食つなよー。」

相変わらず、梨桜ちゃんの事になると心が狭い。

「梨桜ちゃんの昆布巻き好評だったよ」

次の日、青龍のチームハウスに行くとトーブルの上に包みがあった。
食い物か?

「ありがと」

「梨桜ちゃんの料理って誰かに習ったの?」

拓弥さんが聞いている脇で富野が包みを開くと、中から重箱が出てきた。

「和食はタカちやんのお祖母ちやんに教わったの。昨日の昆布巻きも矢野家の味付けだよ」

開ける。

富野、早く重箱の蓋を開けろ!…

念を込めて富野の手元を見てみると、すんなりと蓋が開かれた。

「矢野?」

いなり寿司とおにぎりと…煮物に鳥の照り焼き?卵焼きとサラダ…たくさんのおかずが彩りよく詰められたいた。すつげ…「まそつー!」

梨桜ちゃん、サイ!ー!ー!

「うざ。タカちやんのトロに泊まつしたとき…「お、お泊まつ!ー?」

拓弥さんの「トカ」声に、弁当から一気に引き戻された。ヤローんちにお泊まり!?

ギヨックとしたけれど、富野が平然とおにぎりに手を伸ばしてくるつてことは、安全だったのか?

「うそ。田舎ちやんと一緒に行ったの」

チラリと寛貴ちゃんを見ると、レバちゃんが自然と/ojigatiru手を伸ばしていた。

「タカちやんの伯父さんが経営してるプチホテルなの。お泊りに行つた時にお祖母ちやんのお手伝いしたの。また行きたいな~」

なんだ…焦った。

「今は雪しかないだろ」

「それはそれでいいんじゃない。葵、夏休みの約束覚えてる?」

約束?

梨桜ちやんを見ると、富野の顔を覗き込んで聞いていた。

「…一応」

ムツと肩根を噛むと、ヤシの腕を掴んで揺さぶっていた。

「一応じゃダメー…そーだ!一度タカちやんからハガキが来てたんだよね」

バックからハガキを取り出してペラペラと富野の前で振っていた。

「同窓会ー北海道に行っちゃおつかな」

北海道!?

この前は置いて行かれたからな、今度こそついて行くぞ！

「オレも行きてー！」

「オレも行きたいです！」

オレと小嶋の叫びに梨桜ちゃんは一ツコリと笑つた。

「…かうがひまでも、あいつは…」

行く！！

顰めつ面の宮野と呆れ顔の寛貴さんに梨桜ちゃんはフフッと笑つて
いる。

「葵と寛貴はお留守番？」

宮野がハガキを奪い取り文面を見て一言。

「」の同意会、オヤジのとこから歸る日だぞ？」

גנדי ?

「よく見なよ」

身を乗り出して、宮野が持っているハガキを見て泣きそうな顔になっていた。

「ホントだ…、うひーむ、うへ。」

「フライト変更して国内線に乗り継ぐしかないだろ。……仕方ねえ

な

宮野が呟くと、ふわりと花が咲くような笑顔。
やつぱり、美少女だな。うん。

snow white (2) side・悠

イギリスから帰国して飛行機を乗り継いで来る梨桜ちゃんと待ち合わせ。

梨桜ちゃんとの初旅行はドキドキする。

「寒いな」

文句を言う拓弥さんに「だつたら留守番してりやーーじゃん」と言つとギロツと睨まれた。

結局、いつものメンバーで北海道にやって来た。

梨桜ちゃん + 北海道の美味しいモノ は超魅力的だ。

「来たな、ヤンキー君達」

腕組みをして出迎える姉御…じゃない、梨桜ちゃんの親友。

「それ、嫌だな。拓弥って呼んでよ、田畠ちゃん」

いつもの、女の子用に笑みを見せているけど、軽くとあしらわれていた。

姉御も梨桜ちゃんとは違う意味で手強そうだ。

「双子は？」

デッカイ男、梨桜ちゃんの友達のタカちゃんが辺りを見回している。

「ロンドンから成田経由で向かってる」

寛貴さんが答えると姉御が頷いていた。

年末年始に親父さんが帰国できないから、双子が出向いて行つた。

親子水入らずで過ごすのは大切な事だけど、会えなくて寂しかった。

「そういうればパパさんのここに行くつて言つてたわね」

宮野はずっと一緒になんだよな。

前に一緒にいて窮屈になることが無いのか聞いたら、即答で『無い』

って言われたよな…

オレ、妹と何時間一緒にいて苦痛を感じないだろ?。

「ねえ、藤島君」

姉御が話しかけていた。

寛貴さんに媚びずに堂々と話しかけてくる女って珍しい。

さすが梨桜ちゃんの親友。外見だけで人を判断しない人だ。

「なんだ?」

「分かってると思うけど、今日は尚人もいるからね?・由利は多分来ないと思うけど…」

「ああ…」

「もしも由利が来たら…」

普通は来れないだろ。

富野と三浦の前で恥をかいて、地元チームから都合の良い女として利用されていようと聞いた。

「JのJたちから行動を起こすつもりはない。でも、梨桜に何かしたら保証はできないな」

「…言うだけ無駄だつて言つたろ? Jの面子が東堂の周りにいるだけでアイツは悔しくて地団駄踏むだらうけど、たすがに同窓会には来れないだろ」

タカちゃんが笑うと姉御が眉根を寄せた。

「梨桜を守つてよね? 絶対、ぜつつた的に守つてよー?」

「言われなくともそうしてる」

キーッと悔しそうに唸つている姉御。
あんたが一番危険かも…?

「そろそろ着くかな」

今夜宿泊する予定のホテルのラウンジで双子を待つていると姉御がソワソワし出した。

オレも入口のエレベーターが開く度に梨桜ちゃんかどうか確かめずにいられなかつた。

そんな事をして十数分後、やっと待ち焦がれた人が帰ってきた。

「梨桜！」

姉御が手を振りながら呼ぶと、気がついた梨桜ちゃんはピヨンピヨン飛び跳ねて手を振り返していた。

「おかえり！」

抱き合って再会を喜んでいる梨桜ちゃんと姉御。

「ただいまー！」

彼氏を差し置いてラブライブだな… 寛貴さんとタカちゃんが呆れて見ている。

「梨桜、オレ限界超えた…」

「大丈夫？部屋で休んでる？」

チエックインを終えた富野が手で顔を覆い梨桜ちゃんに寄りかかると、心配そうに富野の頬に手を当てて顔を覗きこんでいた。

「そうする。…遅くなるなよ？」

富野は梨桜ちゃんの頭に手を置いて言つとHレベーターホールへ向かって歩いて行つた。

おーっ！？小姑一号が離脱した！

「梨桜、疲れてない？」

姉御が聞くとニラリ笑っていた。

「まだ大丈夫」

「体力ないんだから無理しないでよ?」

本当にハラハラだな…畠畠みー

「うん。ありがと畠畠ちゃん」

姉御から少し離れた梨桜ちゃんは、クルリと振り返った。

「ただいま」

寛貴さんを見上げて、ニコニコと笑いながら、ピトッとくつついでいた。
…相変わらずだな。

「親父さんは元気だつたか?」

梨桜ちゃんに話しかける寛貴さんの目が凄く優しい。
ふわりと微笑んでいる梨桜ちゃんは凄く嬉しそうで、寛貴さんが大好きなんだって伝わってくる。

「うんー近くの公園を毎日お散歩したの、寒いけど楽しかった

梨桜ちゃんと家族になつたら楽しそうだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902ba/>

秋桜 - another story -

2012年1月8日21時45分発行